



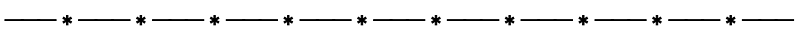
Data

監督：セオドア・メルフィ
 原作：マーゴット・リー・シェタリ
 —『Hidden Figures』—
 出演：タラジ・P・ヘンソン/ジャ
 ネール・モネイ/オクタヴィ
 ア・スペンサー/ケビン・コ
 スナー/キルスティン・ダン
 スト/ジム・パーソンズ/グ
 レン・パウエル/マハーシャ
 ラ・アリ/ドナ・ビスコー/
 ローダ・グリフィス/マリ

👁️👁️ みどころ

近時のハリウッド映画では、大量の人間が地球から他の星へ「移住」しているが、有人宇宙飛行を世界ではじめて成功させたのはアメリカではなくソ連。つまり、ガガーリンが乗ったボストーク1号だった。しかし、3人の黒人女性キャサリン、メアリー、ドロシーが計算係として参加するアメリカはNASAのマーキュリー計画の進展は・・・？

黒人差別を描く映画は多いが、本作のように前向きで明るく、カラッとしたもの珍しい。1960年代のアメリカにおける黒人差別の実態のみならず、我が国で現在大きなテーマになっている「女性活用」や「働き方改革」の在り方にも注目！しかし、本作はマーキュリー計画？それともアポロ計画？いやいや、今更それはどうでもいい・・・？



■□■ 原題は？邦題は？3人の主人公は？ ■□■

本作の原題は『Hidden Figures』。つまり、「隠された人たち」または「知られざる人たち」だ。他方、本作の邦題は『ドリーム』。どちらかと言えば暗いイメージの原題に対して、邦題はまるで正反対のイメージだが、それは本作導入部に登場する3人の黒人女性のイキイキとした姿を見ればよくわかる。

アメリカ南部のヴァージニア州ハンプトンにある米航空宇宙局（NASA）のラングレー研究所で計算手として働き、1台の車に同乗して通勤しているのは、キャサリン・G・ジョンソン（タラジ・P・ヘンソン）、メアリー・ジャクソン（ジャネール・モネイ）、ドロシー・ヴォーン（オクタヴィア・スペンサー）の3人の黒人女性。1960年代のアメ

リカ南東部では、依然として白人と有色人種の分離政策が行われていた。そのため、本作冒頭ではキャサリンの少女時代の天才ぶりが紹介されるが、有人宇宙飛行の一番手を目指して米ソが宇宙開発競争を繰り広げていた1960年代前半では、キャサリンの天才的な数学能力も宝の持ち腐れ・・・？他方、ドロシーは上司に対して働きに見合う肩書きを要求しても、あえなく却下。さらに、3人の中で一番年下のメアリーも、エンジニアトレーニングプログラムに参加するためには白人専用の大学に行かないとダメだと断られる始末だった。

なるほど、本作はそんな3人の黒人女性が主人公だから、『Hidden Figures』という原題に。そう納得したが、それではなぜ邦題は『ドリーム』に・・・？

■□■アポロ計画？マーキュリー計画？それはどうでもいい？■□■

デンマークの少年養護施設での実話をもとに作られた『きっと、いい日が待っている』（1960年）では、宇宙飛行士を目指す10歳のエルマー少年の目から、1960年代当初の、史上初の有人宇宙飛行を目指す様子が描かれていた（『シネマルーム40』参照）が、それを実現したのは1961年4月、アメリカの先を越したソ連の宇宙飛行士ガガーリンが乗ったボストーク1号だった。アメリカは同時期に「マーキュリー計画」を立て、地球周回軌道上に人間を送り込み、安全に帰還させる計画に取り組んでいたが、宇宙開発競争ではっきりソ連に後れをとったわけだ。しかして、「マーキュリー計画」の実現は・・・？また、月面への着陸を目標とした、その後の「アポロ計画」の実現は？それらをリアルタイムで見えていたであろうエルマー少年ならそこらの事情も詳しくははずだが、21世紀の今の時代では「マーキュリー計画」でも「アポロ計画」でも、もはやどうでもよくなっているらしい。

本作の邦題はもともと『ドリーム 私たちのアポロ計画』とされていたが、それは明らかに歴史上の事実誤認。そのため、「マーキュリー計画を扱った作品なのに、なぜアポロ計画なのか」という趣旨の批判がSNS上に相次いだらしい。こうした批判に対して、日本での配給を担当する20世紀フォックスは「日本の観客に広く知ってもらうため、宇宙開発をイメージしやすい『アポロ計画』という言葉を選んだ」「本作はドキュメンタリー映画ではないので、日本人に伝わりやすい言葉を思案した結果」とコメントしたが、結果的には批判を重く見て、2017年6月9日、『ドリーム』と変更したようだ。

本作はアメリカでは大ヒットしているし、そんな話題性もあってか日本でもかなりの人気。しかも本年度のアカデミー賞の作品賞、助演女優賞、脚色賞にノミネートされているから、ひょっとして・・・？いやいや、本作の出来と私の予想では、それはちょっとムリ・・・。

■□■数学の実用性は？なるほど、このように活用！■□■

キャサリンが、NASAの研究本部の計算係に採用されたのは、冒頭に描かれた彼女の

天才少女ぶりのおかげ。しかし、そんな「かつての天才少女」でも、NASAではメアリーをリーダーとする計算室で上から指示された計算をしているだけだから、はっきり言って機械と同じ。そして、本作後半ではIBMが電子計算機（今でいうコンピューター）を開発すると、メアリーの計算室はごっそり廃止され、IBMを使う計算センターに組織替えられてしまうことになる。

ちなみに、私は中学時代から数学が苦手だったから法学部に入り弁護士になったが、『博士の愛した数式』（06年）は面白かった（『シネマルーム10』177頁参照）。もしあの時、博士のような授業を聞いていけば、俺もひょっとして……。黒板上に数式を書き並べていくキャサリンの姿を見ていると、そんな感慨も……。法学部に進んだ私と違い、1学年違いの兄は京大の数理工学に進んだが、彼は一体どんな研究をしていたの？それを聞いた私に対して兄は「わかりやすくいえば、ロケットやミサイルをどうやって追跡するのかの計算をしている」と答えていた。私は当時その意味が、さっぱり分からなかったが、本作でキャサリンがやっている作業（計算）を見ていると、なるほど、なるほど……。

去る10月10日に朝鮮労働党の結党第72回記念日を迎えた北朝鮮では、アメリカ本土の東部まで到着するICBMがすでに完成しているそうだが、金正恩（キム・ジョンウン）が近時大いに優遇している北朝鮮の数学者たちも、きっとキャサリンと同じような計算をしているのだろう。そう考えると、私たちが中高校時代に勉強していた数学がいかに実用的で大切なものかがよくわかる。なるほど、数学はこのように活用！

■□■黒人差別の実態は？キャサリンの場合は？■□■

アメリカでは黒人差別の悲惨さを描く小説や映画は多い。その代表的小説が『アंकルトムの小屋』だし、代表的映画が『アミスタッド』（97年）（『シネマルーム1』43頁参照）だ。「白すぎるアカデミー賞」と批判された第88回アカデミー賞の反動として（？）第89回アカデミー賞では『ムーンライト』（16年）（『シネマルーム40』10頁参照）が作品賞を受賞する等、黒人をテーマとした映画の健闘が目立ったのは記憶に新しい。

しかして、原題名を『Hidden Figures』、邦題を『ドリーム』とする本作も、1960年代初頭にNASAで働く3人の黒人女性を主人公として、黒人差別と女性差別を描く映画。しかし、描き方は『ムーンライト』のようなネチネチしたもの（？）ではなく、カラッとしているのが特徴だ。本作前半で描かれる黒人差別の1つは、その象徴ともいえる有色人種用のトイレ。キャサリンが所属していた計算室が入る建物には有色人種用のトイレがあったが、キャサリンが新たに配属された本部の建物には有色人種用のトイレがなかったから、キャサリンは大変。仕事の合い間にキャサリンが備え付けコーヒーを飲もうとすると……。さらに、研究本部に入ったキャサリンをモロに差別的な目で見える先輩ポール（ジム・パーソンズ）だが、彼のそんな差別意識の源泉は……。少し誇張気味だが、本作のキャサリンに見る、これらの黒人差別の実態をしっかり！

■黒人差別の実態は？ドロシーとメアリーの場合は？■

自分の役割に見合った役職を与えてくれと再三願い出ていたドロシーに対して、直属上司のミッチェル（キルスティン・ダNST）は「前例踏襲が当たり前だ」とばかりに、「それは無理だ」と答えていた。しかし、その彼女は、自分は黒人差別をしていないと「自覚」していたから、それをドロシーから指摘されると・・・？

他方、3人の中で、もっとも若いメアリーは白人の大学に入ろうとしたところ、「前例がない」と断られることに。しかし、そこに見るメアリーの行動力は凄い。自ら裁判所に乗り込み、裁判官に対して「一番最初の人間になるということがどれだけ大切かをご存知だと思います。私はNASAでエンジニアになろうと思っていますが、自分の肌の色は変えることはできません。なので自分が最初の人間になる以外に選択肢はありませんし、それにはあなたのお力なしには実現できません」と訴えると、裁判官は・・・？

これも少し誇張気味だが、これらのシークエンスを見ているとたしかに観客はスカッとする。しかし、それはきっと映画の上だけの話。もっとも、黒人差別の悲惨さを執拗に描くのも映画づくりの1つの方法だが、本作のようにカラッと描き、その賛否、判断を観客に委ねるのも1つの方法だ。さて、あなたはどちらがお好み・・・？

■組織のリーダーのあり方は？小池百合子氏のそれは？■

本作の主人公は3人の黒人女性だが、それを統括する立場で本作全編を通じて、カッコイイ存在感を見せるのが、ケビン・コスナー扮する宇宙特別研究本部の責任者アル・ハリソン。宇宙開発競争の行方を一手に引き受けるハリソンの責任は重大だし、重圧は相当なもの。そんな彼が、夜遅くまで全体を統括する仕事をやりつつ、黒人ばかりが集まる計算室の女性の能力、人柄まで配慮する姿は素晴らしい。

アメリカ大統領府における大統領とその側近たちのあり方は、トランプ大統領の就任後、色々なトラブルが続いてきたこともあって世界に知られてきたが、NASAの研究本部でも、そんな組織論は同じ。日本よりアメリカの方が会議は少ないだろうが、それでも、役職に応じて与えられる情報が異なり、決定できる権限に差異があるのも当然。そして、そのことは何を意味するかというと、メアリーやキャサリンたちは上から与えられた条件下で計算しろという任務が与えられるだけというだけだ。そこで問題は、与えられる条件が会議ごとにコロコロ変わる。それなら、キャサリンたちも、その会議に出席していれば、リアルタイムで計算し直せるのだから、いっそのことキャサリンも会議に出席させれば・・・？それがキャサリンの考えだったが、それは基本的には無理。なぜなら、その会議では別の事項も議論されるから、情報管理上、権限のない者を参加させると秘密が漏洩する危険があるうえ、何よりも前例がないからだ。なるほど、なるほど。

しかし、考えてみれば、そんな問題は私たち弁護士の世界でも同じ。そのため私は独立

して、弁護士事務所を構えた1970年以降は、優秀な事務員を依頼者の相談に同席させて話を聞くシステムをとってきた。メモを取らせ、記録を作らせるという形で事務員に一定の責任を持たせたい以後の作業も共同作業方式とし、執務室も弁護士室と事務局室を分離せず大部屋にしたが、これはその当時としては画期的なシステムだった。本作に見るハリソンの改革のあり方はそれと同じだったから私は大いに納得したが、これは一体どこまでホントなの？

日本では去る9月28日の衆議院の解散に合わせて、小池百合子東京都知事が「希望の党」を立ち上げたが、選挙戦の開始後、結党時の勢いを完全に失ってしまった。それはきっと小池百合子代表が本作におけるハリソンのような、あるべきリーダーの姿を示していなかったためだ。私はそう思っているが、さて、あなたは・・・？

■最後の最後は人間の計算力に依拠！■

遅ればせながらアメリカでも、マーキュリー計画の成功によって宇宙飛行士ジョン・グレン（グレン・パウエル）が、地球を3周する周回軌道飛行をアメリカ人としてはじめて成功させたのは歴史的事実。この時、NASAの研究本部ではすでにキャサリン達の手計算ではなく、IBMのコンピューターがすべての計算をやっていたが、最後の最後にジョン・グレンが地球に帰還する地点の計算については、どうしても人間の計算力による確認が必要になっただけ。そのため、本作ラストのハイライトは、そんな状況下で宇宙飛行士のジョン・グレンもハリソンもキャサリンの計算能力にすべてを託することになる。これも私にはどこまで本当の話かわからないし、少し誇張気味だと思うが、そんな中で発揮されるキャサリンの計算能力はすごい。まさに、少女時代に天才少女と呼ばれていただけのことがあると納得！

ちなみに、キャサリンは『アポロ11号』のほか、『スペースシャトル計画』でも手腕を発揮したため、2016年NASAは計算施設に彼女の名を冠しその功績をたたえたそうだから、本作に見るキャサリンの逸話も含めて本作に登場する3人の黒人女性の活躍ぶりは、ほぼTRUE STORY・・・。

2017（平成29）年10月20日記